

植物

花はどうやって咲く時期知るの

気温の変化、昼夜の長さの変化で

私たちは、植物の花が咲き、新芽が出るのを見て「春だな」と感じます。では、植物はどうやって「春が来た」と感じているのでしょうか？

○気温の変化

寒い冬が過ぎ、暖かくなると「春らしいね」と感じるように、植物も温度の変化を感じています。例えば、桜の花なら、花のもとになる花芽は前年の夏に作られますが、花芽は成長しないで休眠という状態で冬をすごします。花芽は冬の間、低温にさらされることで休眠状態が終わり、花を咲かせる準備ができます（これを「休眠打破」といいます）。その後、春に温度が高くなるにしたがい、花芽は成長し、花を咲かせます。花も寒い冬があるから、春の暖かさを感じるのですね。

○昼夜の長さの変化

私たちが、春になると「日が長くなったね」と感じるように、植物の中にも昼と夜の長さ（「日長」といいます）の変化を感じて花を咲かせる種類があります。カーネーションやキンギョソウなどは、春になり、昼の時間が長くなると花芽を作り、開花させます。反対にキク、コスモスなどの秋に咲く種類では、昼の時間が短くなったことを感じて花芽を作り、花を咲かせています。

○農業への利用

ストックという花の栽培では、春先に外よりも暖かい温室で栽培すると開花が早まり、3月には花が咲きます。また、キクでは秋の夜間に電気をともすことにより、夏が続いているように錯覚させ、正月や彼岸の時期に花が咲くようにしています。これを電照菊といいます。電照菊の産地では、たくさん温室に明かりがともった幻想的な夜景が、秋の風物詩にもなっています。人は電照菊の明かりをみて秋を感じますが、温室の中のキクは夏だと感じています。ちょっと不思議な現象ですね。

